

エンパワーメント型アプローチに基づく幼保小連携  
・ 接続の実践的研究：  
「違い」を「強み」に変えるための「対話」

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2016-06-13 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 本荘, 文康 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.14945/00009547">https://doi.org/10.14945/00009547</a>

# エンパワーメント型アプローチに基づく

## 幼保小連携・接続の実践的研究

—「違い」を「強み」に変えるための「対話」—

本荘 文康

The Empowerment Type Approach to Preschool/Elementary School  
Cooperation and Connection : Dialogue for Changing Difference into Strength  
Fumiyasu HONJO

### 1 本研究の目的及び問題意識

近年、幼稚園・保育所・小学校の連携（以下、幼保小連携）の必要性が求められている。2005（平成 17）年の中央教育審議会「子どもを取り巻く環境の変化を踏まえた今後の幼児教育の在り方について（答申）」では、幼児教育（小学校就学までのすべての子どもに対する教育）の今日的な課題として、幼児教育を構成する家庭や地域社会の教育力が低下し、子どもの育ちに影響を及ぼしていることを指摘している。そのため、同答申では、①幼稚園施設の教育機能を強化・拡大すること、②幼児教育と小学校教育双方の質を向上させることが必要であるとしている。

その後、2006（平成 18）年に改正された教育基本法第 11 条では、幼児期の教育は生涯にわたる人格形成の基礎を培うものであるとされ、2007（平成 19）年改正の学校教育法では、幼児教育は義務教育及びその後の基礎を培うものと位置付けられている。さらに、2008（平成 20）年には、幼稚園教育要領、保育所保育指針、小学校学習指導要領が改定され、その内容には、幼保小連携が盛り込まれており、各地で幼保小連携についての取組が進められてきた。筆者は、秋田（2013）の示す 3 つの視点から、これらの取組を「問題解決型（適応型・対等関係型）」と「エンパワーメント型」に整理した（表 1）。

表 1 幼保小連携の 3 つの流れと筆者の定義

筆者の定義	問題解決型		エンパワーメント型 【本研究の位置】
	適応型	対等関係型	
秋田の 3 つの視点	就学準備や小 1 プロブレムへの対応として、幼児期から小学校への移行と小学校文化への適応を中心とする視点	幼保小は対等な立場として保育園や幼稚園と小学校の接続カリキュラム開発を中心とする視点	相互において異質なものの「出会いの場」として、歩み寄りの対話と共通の理解の中で一つの地域の保育・教育の文化を創りだそうという視点

出典：秋田（2013）を参考に筆者が作成 ※定義は筆者による

このようにわが国において幼保小連携の取組は進められてきたが、課題も指摘されている。2010（平成 22）年に、文部科学省は「幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方について（報告）のポイント」においては、幼小接続の重要性は理解されているが、保育・教育課程の接続が難しいことや幼稚園・小学校教員の相互理解が進んでいないことを課題として挙げている。

同報告においては、相互理解が進んでいない理由として、特に幼小の教育の違いについて十分に理解していないことに言及している。以上のことから、本研究の課題を3点挙げる。

第1に、保育者と教員の相互理解が不足しているということである。その理由として、まず時間的・物理的に互いに顔を合わせる職務上の交流が困難であることが挙げられる。しかし、時間的・物理的な理由のみが相互理解を妨げているのか、またどのような手立てを講じたら相互理解が進むのかを検証する必要がある。第2に、保育課程・教育課程編成を中心的に進めていく園主任及び小学校主幹教諭・教務主任が、幼児教育から小学校教育への接続を意識することが必要であり、そのための力量形成の場が必要である。第3に、保育者・教員・保護者・幼児・児童等の実態を把握し、その実態に基づいて保育・教育をすることが必要であり、それらの取組を継続させていく仕組みが必要になる。また、先に述べた課題2点は大切であるが、子どもは園及び学校でのみ育つわけではない。そのため、子どもを見守る関係者同士の連携が重要になる。さらに、就学に向けて保護者が抱く不安の実態についても質問紙調査等を実施し、それらを活かした幼児教育から小学校教育への接続カリキュラムと、その作成のための基礎資料を作成する必要がある。ここに本研究の課題が所在する。以下、作業課題を併せて表2にまとめる。

表2 本研究の課題及び作業課題

課題	作業課題
1 保育者と小学校教員の相互理解を図るための機会を提案する	(1) 就学前教育及び幼保小連携・接続の動向の整理 (2) A市立B小学校とA市立D幼稚園における交流及び研修への参画 (3) A市幼保統一カリキュラム「Aっ子すくすくプラン」作成に参画
2 連携を進めていく保育者及び小学校教員の力量形成のための研修を提案する	(1) A市教育委員会主催幼稚園教諭マネジメント研修会の企画・運営への参画 (2) 幼稚園幼児指導要録及び保育所児童保育要録についての整理 (3) A市公立幼稚園研究会研修「ワールド・カフェ」の企画・運営
3 幼児・児童・保護者・保育者・教員の実態を踏まえた、幼児教育から小学校教育への接続カリキュラム作成のための基礎資料を作成する	(1) 保育課程及び教育課程編成の過程の整理 (2) A市立B小学校における幼保小連絡会の内容の実態把握及び改善策提案 (3) 実態把握アンケートの実施及び、結果の活用 (4) 上記の実践を基に保育・教育課程改善・接続のためのプロセスを提案

## 2 研究方法と分析視角

筆者が定義し、提案する「エンパワーメント型アプローチ」では、「見直す」・「実感する」・「学ぶ」・「活かす」というプロセスにおいて、様々な「対話」を、様々な「機会」に行う。なお、本研究では、エンパワーメントを「力をつける・元気になる」という意味で使用する。

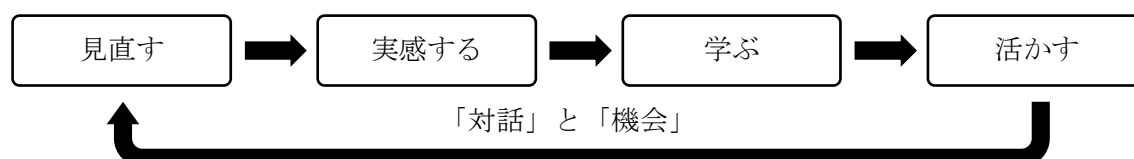


図1 エンパワーメント型アプローチ

以下、アクションリサーチでの「対話」と「機会」について、2つの分析視角、1「社会構成主義の4つのテーゼ」、2「連携レベル」をもとに検討し、幼保小それぞれの「違い」を強みに変え、保育者・教員だけでなく、子どもの育ちを見守る関係者をエンパワーメントできたのかを考察する。なお、分析視角1「社会構成主義の4つのテーゼ」の「テーゼ」の意味は、一般的に「命題・定立〔広辞苑〕」だが、筆者は「テーゼ」を「肯定的な主張」という意味で用いる。

表 3 分析視角 1 と本研究との関係

社会構成主義の4つのテーゼ（肯定的な主張）	本研究との関係
1 「言葉から解放された事実」 ・私たちが世界や自己を理解するために用いる「言葉」は、「事実」によって規定されない	「実感する」 交流活動、授業案検討、幼保統一カリキュラム
2 「関係性から生み出される意味」 ・記述や説明、そしてあらゆる表現の形式は、人々の関係から意味を与えられる	「学ぶ」 キャリアデザインシート、カリキュラム・イメージマップ、ラウンドテーブル、ワールド・カフェ
3 「行動の新たな可能性」 ・私たちは、何かを記述したり、あるいは別の方法で表現したりする時、同時に、自分たちの未来をも創造している	「活かす」 幼保小連絡会、実態把握アンケート、幼保小連携・接続サイクル
4 「自省と対話」 ・自分たちの理解のあり方について反省することが、明るい未来にとって不可欠である	「見直す」 幼保小連携及び先行事例の検討、様々な対話の実践

図 1 は、筆者が作成した A 市幼保小中連携教育レベル図である。これまで A 市では、様々な「機会」に、幼保小中連携教育の実践が行われてきた。しかし、各レベルでの実践は、整理されていない。そこで筆者は、これまでのレベル①から④までの実践を活かし、必要に応じてリデザインするとともに、レベル⑤及びレベル⑥の実践を行った。分析視角 2 として、この「連携レベル」を用いる。

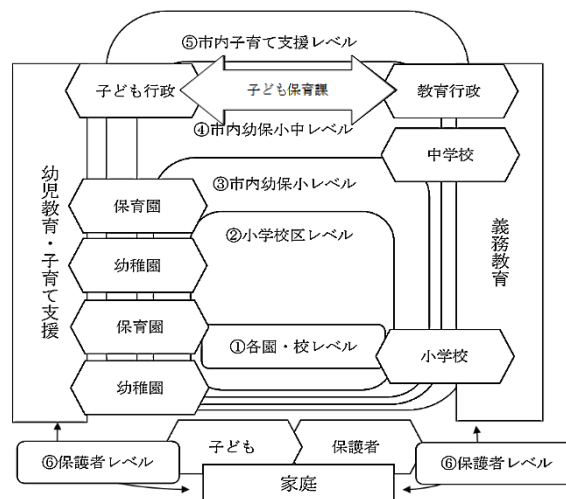


図 1 A 市幼保小中連携教育レベル図

### 3 違いを「見直し」強みに変える

まず、世界及びわが国、静岡県及び A 市における幼保小連携の動向・子育て施策を整理し、様々な違いを「見直し」て、アクションリサーチと関連付けた (表 4)。これまで続けてきた幼保小連携・接続の取組は、社会の変化に伴う就学前教育・子育ての在り方によって大きく変化してきたことがわかる。これからは、これまでの歴史的経緯や法令等の位置付け、先行実践の成果と課題等を踏まえ、それらの違いを知り、「見直す」ために、できる限り客観的なデータと園・学校等子どもに関わる関係者の声を反映させる機会を設け、幼保小連携の在り方を考える必要がある。

#### 4 違いを「実感し」強みに変える

ここから、3つの違い〔①幼児・児童（発達段階を含めた）、②場所（園舎・校舎、プール等の施設設備）、③大切にしてきたこと（幼稚園・保育園・小学校）〕について、実践を通して「実感し」強みに変えることができたかについて、分析視角1-1「言葉から解放された事実」及び分析視角2「連携レベル」を通して考察する。

ここでは、A市立B小学校及びA市立D幼稚園との間の交流（事前・事後の打ち合わせを含む）及び算数科授業案検討を通して、保育者と小学校教員が直接の対話を

もつことで、書面ではわからない保育・教育についての違いを「実感する」きっかけを創ることができた。特に、算数科授業案検討については、先立って行われた交流において、A市立B小学校及びA市立D幼稚園の教員と保育者が、何度も顔を合わせていたことが、実施のきっかけとなった。

今後は、連携レベル③市内幼保小レベルの枠組みで、A市幼保統一カリキュラム検討を継続し、幼稚園・保育園・小学校が互いの違いを知り、同カリキュラムの内容について、A市内の園・小学校での実践をもとに「実感し」強みを見出すことを通して、同カリキュラムの見直し続けていくことが求められる。

#### 5 違いを「学び」強みに変える

ここから、4つの違い〔①経験・年齢（保育・教育の歴史的経緯を含む）、②環境（園と園を取り巻く条件等）、③役割（園・学校・教育行政・福祉行政等）、④言葉と文化（要録等で使用される言葉の意味）〕について、研修を通して「学び」強みに変えることができたかについて、分析視角1-2「関係性から生み出される意味」及び分析視角2「連携レベル」を通して考察する。

ここでは、A市幼稚園教諭マネジメント研修会及びA市立幼稚園教育研究会研修において、様々な形態の対話を通して、様々な表現（「キャリアデザインシート」の作成、「カリキュラム・イメージマップ」の作成、「ラウンドテーブル」での語り、「ワールド・カフェ」での模造紙への書き込み、各研修の振り返り等）を行うことができた。そして、その表現は、多様な参加者との「対話」を通して、新たな意味を参加者にもたらすという「学び」につながった。

今後は、連携レベル①各園・校、②小学校区において、園の研修に小学校教員も参加する等、多様な関係性の中での対話を通して「学び」を生む取組を継続させることが必要である。

#### 6 違いを「活かし」強みに変える

ここでは、3つの違い〔①保育・教育課程とカリキュラム観、②必要とする情報（保育者・教員）、③立場（保育者・教員・保護者）〕について、仕組みを通して「活かし」強みに変えること

表4 幼保小の違いと本稿との関係

違い	本稿との関係
幼児・児童（発達段階を含めた）	4「実感する」
場所（園舎・校舎、プール等の施設設備）	
大切にしてきたこと（幼稚園・保育園・小学校）	
経験・年齢（保育・教育の歴史的経緯を含む）	5「学ぶ」
環境（園と園を取り巻く条件等）	
役割（園・学校・教育行政・福祉行政等）	
言葉と文化（要録等で使用される言葉の意味）	6「活かす」
保育・教育課程とカリキュラム観	
必要とする情報（保育者・教員）	
立場（保育者・教員・保護者）	

ができたかについて、分析視角 1-3「行動の新たな可能性」及び分析視角 2「連携レベル」を通して考察する。

ここでは、評価の機会及び保護者との対話である「実態把握アンケート」・保育者との対話である「幼保小連絡会」をもとにした「幼保小連携・接続サイクル」を提案・実践した。これらは、カリキュラム改善の動機と検証（実態把握アンケート・幼保小連絡会）及びカリキュラム改善の継続（幼保小連携・接続サイクル）に寄与する可能性がある。

特に、保護者の就学に向けた不安の実態を調査することは、就学予定児童の不安について把握することにつながり、小学校と保護者・

家庭の認識の違いを明らかにし、就学へ向けた準備に「活かす」ことができる。

今後は、連携レベル②小学校区から、③市内幼保小・④市内幼保小中レベルで行われることが必要であり、さらに保育者及び家庭・保護者との対話が、どのように保育課程・教育課程の具体的な接続・改善に「活かされた」のかを検証する必要がある。

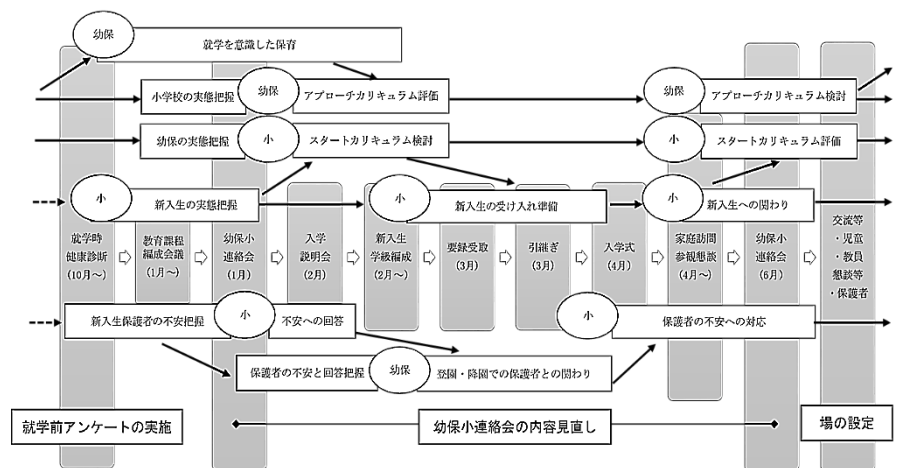


図 2 幼保小連携・接続サイクル

## 7 本研究のまとめと提言

本研究の成果として、4点を挙げる。第1に、これまでの幼保小連携等の様々な違いを「見直す」ことができた。第2に、様々な形態の実践を通して書面ではわからない事実を「実感する」きっかけを創ることができた。第3に、研修を通して、様々な実践に新たな意味を参加者にもたらす「学び」の機会を提案することができた。第4に、幼保小連携・接続サイクルでは、アンケート等で保護者の不安の実態を調査し、小学校と保護者の認識の違いを明らかにするとともに、新たな対話から違いを「活かし」強みを自覚した保育・教育を生む可能性を検討できた。

本研究の課題として、「実践と研修の一体化」を挙げる。図3に、本研究で扱えなかった部分を楕円で示し、A市幼保小連携・接続への手がかりとして、今後の取組について考察する。

本研究で述べてきたように、保育・教育、幼保小連携・接続に関わる歴史的経緯や法令等の位置付けを知り「見直す」ことによって、保育者の相互理解をするきっかけを提案した。さらに、「実感し」・「学び」・「活かす」プロセスである「エンパワーメント型アプローチ」によって、保育者・教員を力付ける機会を提案した。そして今後も、学び続ける保育者・教員であることが必要である。つまり、保育者・教員が行う「実践と力量形成に資する研修の一体化」をすることが必要であり、幼保小中連携・接続における様々な「機会」の「対話」によって、それが促進される。以下、これらを踏まえ、今後のA市幼保小中連携教育の在り方への提言を示す。

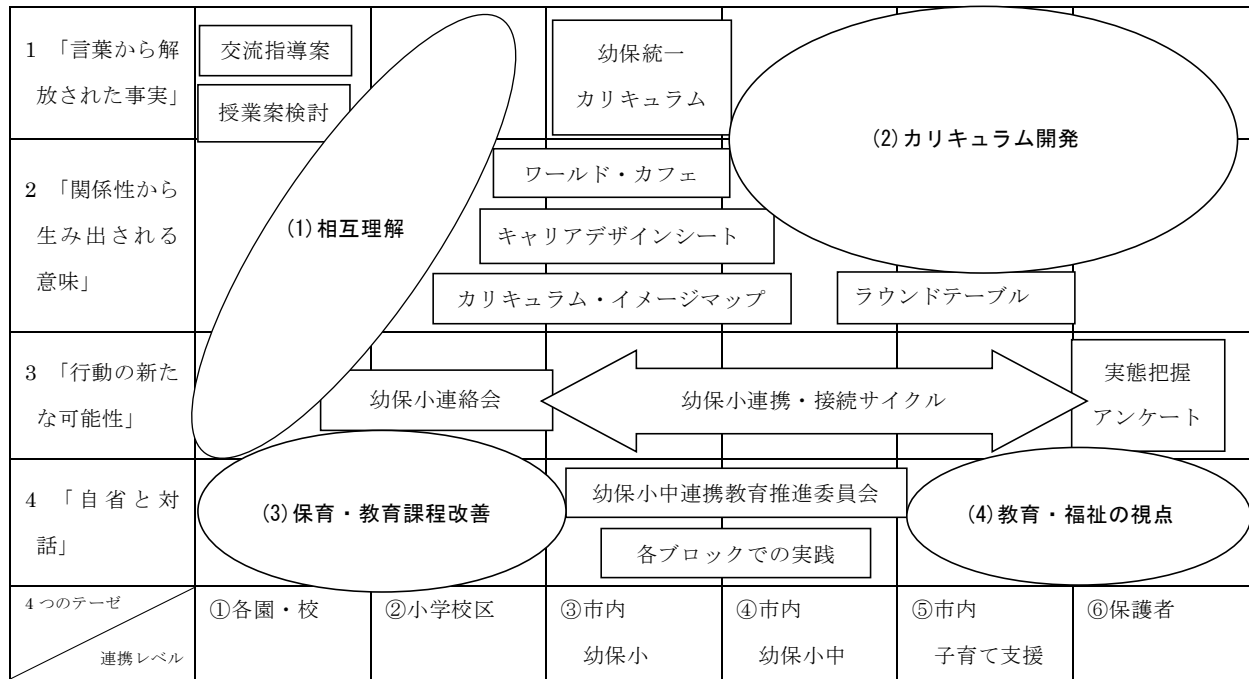


図 3 本研究の全体図と今後への手がかり（糟田部分）

筆者は、表 5 [(1) 相互理解、(2) カリキュラム開発、(3) 保育・教育課程改善、(4) 教育・福祉の視点] のように、様々な「機会」、様々な「対話」を通じて、「実践と研修の一体化」を図る取組を提案する。今後は、各「連携レベル」での実践が求められる。そして、その実践と成果は、A 市幼保小中連携教育が積み重ねてきた営みをベースに繋がり、子どもに還元される。

表 5 A 市幼保小連携・接続への手がかり「実践と研修の一体化」

手がかり	内容
(1) 相互理解	・「幼保統一カリキュラム」を活かした「交流」、「保育・授業参観」 ・「幼保小連絡会」、「保育・授業参観」後の「対話」（例：ワールド・カフェ等）
(2) カリキュラム開発	・「幼保統一カリキュラム」検討に、小中学校教員も参加し、必要に応じて、福祉行政関係者や保護者の意見も参考にする（例：ラウンドテーブル等）
(3) 保育・教育課程改善	・(1) 相互理解の取組についての知識を共有する（例：各ブロックや A 市幼保小連携教育推進委員会等）
(4) 教育・福祉の視点	・実態把握アンケートだけでなく、福祉行政等の持つ情報及び保護者・地域の意向を知るための機会を設ける（例：学校支援地域本部、PTA の会合等）

〈主要参考文献〉

- 秋田喜代美・第 1 日野グループ『保幼小連携：育ちあうコミュニティづくりの挑戦』ぎょうせい,2013 年  
 ケネス・J・ガーゲン『あなたへの社会構成主義』ナカニシヤ出版,2004 年  
 酒井朗・横井紘子『保幼小連携の原理と実践：移行期の子どもの支援』ミネルヴァ書房,2011 年